

悟性の成立と少年期の人間関係

——Gemeinsinn (I.カント) と間主観性 (J.ラカン) の概念を手掛りとして——

野田 義一

常識的には思惟Cogitoは人間の脳小脳という身体器関の作用であり、遺伝という生物学的要因によって（いはば）運命的に規定されたものである。勿論私もこうした面を否定するつもりはいささかもない。しかし思惟は、——こうした生物学的要因によってよりは、——むしろ我々をとりまく人間関係という社会的要因によってこそ形成されるものでなくてはならない。そしてこれが本稿の基本的立場なのである。

そこで前稿（本学概要9号）で私は先ずこの人間関係の最初の段階である幼児期をとりあげ、親に全面的に依存して生きている子供たちの家庭での人間関係こそ「感性的な認識」という「この時期に特有な」認識の仕方を生みだす母胎である、ということを論じた。そこで前稿の展開としての本稿では論を少年期に移し、Gang Ageと呼ばれるこの時期に特有な彼等の人間関係こそ「悟性」という「具体的で現実的なものについての事実判断の能力」を生みだす唯一の母胎である、という点について論述してゆくことにしたい。（そしてこうした立場の上に立って、次稿では青年期に特有な「理性」という純論理的な作用の成立について論じてゆくことにしたい。）

[I] 「間主観性 (J.ラカン) 及びGemeinsinn (I.カント) の概念について

そこで以上のような本稿の立場を一層明確にするために、私は先ずラカン（及びラカン派の人々の）の「間主観性」及びカントのGemeinsinn（共通感）の概念について——ごく荒く、では

あるが——ふれてゆくことにしたい。

(a) ラカン（及びラカン派）の「間主観性」の概念

ところで思惟といえはそれは脳小脳という生理学的な器関の作用である、というのは世間一般の常識である。しかしこうした常識的な考え方は果してどこまで正しいものであるのだろうか。これまで西欧を中心として回転してきた世界史の地軸が大移動しようとしている現在、西欧の物質文明を支え続けてきたデカルト的なコギトに対し、今こそ根底的な疑問を投げかけてゆくべき時ではないであろうか。

こうした意味でラカンが次のように言っているということは私にとってはまことに意味深い。「この精神分析の経験は我々をコギトから由来する総ての哲学に対立させる。」⁽¹⁾と。（こうした彼の基本的立場について藤田教授も「（これまで）西欧思想を支配し続けてきたコギトをまず抹殺することによって始まるラカンの発想は……」⁽²⁾と、「抹殺」という強い言葉を使用して述べていられる。）勿論こうした激しい言葉が医学以外の他の世界から発せられたのであれば、それは必ずしも諸方面に波紋をひき起こすことはなかったであろう。例えば近代の合理主義に対して既に以前から生命哲学はこれを「本来水々しいものである人間生命からその躍動的な活力を奪い、これを窒素させる元兇」として批判し続けてきた。しかし医学といえは「自然科学的発想が支配的な世界」というのが世間一般の常識である。そしてラカンも亦精神科の医師であ

る。しかしこうした医学の世界の一人である彼のこうした発想、そしてこうした発想の上に立ち、精神病の発生の源は患者をとりまく「人間関係」の乱れにあるとする彼の立場は、私にとっては、まことに衝撃的であると共に新鮮なものであった。

たしかに「我思う」(コギト)と言え、常識的には、それを担うのは「個人」という生理学的な身体的存在である。しかし彼はこのエゴ及びその論理的で対象把握的なコギトに徹底的な批判の眼を向け、ここに患者を「人間」として、つまり人と人との相互関係の中に生きる「社会的存在」としてつかんでいった。そしてここに個々人を超えたものとして存在し、これら個々人を媒介して相互に出会わせ、彼等を一定の人間関係の中に結びつけてゆく超個人的で第三者的なものを彼は「間主観性」、又は(「法の代理者」としての)「父」とよんでいった。こうしてラカン(及びラカン派の人々)にとっては精神病の発生の源は——生理学的な要因ではなくて、——むしろ患者をとりまく人間関係の乱れにある、つまり人と人とを媒介して相互に出会わせ、ここに彼等を一定の人間関係の中に結びつけてゆく間主観性、(又は「法の代理者」としての)「父」という第三者が不完全にしか形成されていない、というところにこそ存在する、ということになる。

例えば幼児期における家庭での人間関係において、——本来ならば——母と子との共生関係的な強い結びつきの間に「法の代理者」としての父という第三者が介入し、ここに父と母及び子の三者の間に正常な人間関係が形成されてゆくはずである。ところが時には人と人とを媒介して相互に出会わせてゆくべきこの「間主観性」という超個人的で第三者的な媒介作用が不十分にしか成立していないような家庭もある。(この場合私はこの人と人とを媒介して相互に出会わせる「会い」の作用を「愛」と読み進めてゆく。)こうして家庭での不完全な人間関係の中に育った幼い彼等は、間主観性(換言すれば愛)という人間にとって最も大切なものを欠いた家での冷たい人間関係の中で育ってゆくうちに自然にこうした人間関係に馴染み、これを自己の生命

にまで化肉化してゆく。こうした点について現象学的精神医学の立場に立つ木村教授は「このようにしていれば患者自身を含めた家族ぐるみのSchizophrenogenicな『あいだ』の持ち方の中で育った患者は、この特徴的な『あいだの持ち方』を自分と他人との出会い方として身につけることになる」⁽³⁾と言っている。(傍点筆者)

ところで精神分析の世界では幼児体験が夫々の人に対して持つ意味がしきりに強調されているが、幼児期におけるこうした乱れた人間関係はその子の成長に伴って次々と構成されてゆくその子の後続の人間関係にも影響を及ぼしてゆく。そして——たしかに私は精神医学には全くの門外漢にしかすぎないのであるが、——「精神病の発現の源はこうした乱れた人間関係により、『間主観性』という第三者的なものが充分には確立されていないところにある」とするラカン及びラカン派の人々の立場に(教育学の立場から)深い共感を抱かざるをえないのである。従ってこうした立場から、次のような木村教授の言葉に全面的な賛意を表せざるをえない。(そこでやや長文であるが同教授の言葉を下に引用してゆくことにする。)(「この1918年のシンポジウムの報告で私は)分裂病者を育てた家族について従来から『分裂病的』Schizophrenogenicとよばれる特徴を、分裂病という『結果』にとつての『原因』としてではなく、分裂病者を支配しているのと同じひとつの基本構造が(病気という形をとって)別の成員に現われたものと見る立場を表明している。この立場からすると、この基本構造は——したがって分裂病自体の基本病理も——ある個人の構造や病理ではなく、間主観的・前人稱的な関係ないし『あいだ』に生じている事態だということになる。」⁽⁴⁾(傍点筆者)

(b) カントと「間主観性」

こうしたラカン(及びラカン派の人々)の精神医学に対する新鮮な発想は、——私がフロイトの思想に初めて接した時以上に、——私に激しい興奮をひき起こしていった。何故なら——勿論私はこうした精神医学とは全く違った教育

学の世界の中にある者であるが、——しかし私は私の研究生活の初期の頃から一貫して「児童生徒における思惟の成立と発達」を追求し続けてきた者である、そしてこうした立場を支える私の基本概念は——「人の間」又はジンカンとも読めるものとしての——「人間」、つまり人と人（及び人と自然）との間にあってこれら両者を媒介して相互に出会わせてゆく「間主観的」で「間身体的」なものとしての「人間」という概念である。こうして私においては児童生徒の思惟の能力は、——大脳小脳などという個々人の生理学的な器関などではなくて、——むしろ「人間関係」において初めて成立するものであるからである。（こうした点において私は——期せずして、——ラカント同じような立場に立っていたのである。）

もっともこの「人間」という概念、及びこの概念をめぐる「思惟は人間関係において初めて成立する」という着想は、私においては、戦後の日本の教育界を風靡したJ.デューイの経験主義、生活主義教育論からの脱出と脱皮のものがきの中において獲られたものである。しかもこの「人間」という概念をめぐる児童生徒における思惟の成立についての理論を構築しこれを体系化してゆくに当って、私は（カントの批判哲学と共に）、フッサールの現象学の「先験的間主観性」die Transzendente Intersubjektivitätの概念によって大きく影響されているのである。（してみると間主観性の概念の上に立つラカン及びラカン派の人々の上記のような立場に私が激しく反応していったということはまことに自然なことであろう。）

ところでフッサールの現象学（特にその「先験的間主観性」の概念）⁽⁶⁾については拙著拙論で既に何度となく論述済みなので、今はこれについての論述をひかえてゆくことにしたい。しかし私の「人間」及び「間主観性」の概念の理論化に当って（フッサールと共に）私に大きな影響を与えたカントの三批判書の中には「人間を『間主観的』で「間身体的」なものとしてとらえる」という立場が——たしかに表面的には人に気付かれにくいようなヒソカナ姿においてではあるが、——すでに厳然と存在しているので

ある。（しかし残念ながらこうした点を取りあげたカントについての研究書はこれまで殆どなかったのではあるまいか。）そしてこうした角度から改めて彼の三批判書を眺めてゆく時、それは随分と異なった性格と外観を持つものとして我々の前にその姿を現してくるであろう。そこで本稿の主題に入ってゆくための準備として、以下私は彼の三批判書の中に（ヒソカナ姿においてではあるが厳然と存在している）「間主観性」の概念について眺めてゆくことにしたい。

たしかに表面的に見る限り、彼の第一批判では認識は先験的自我という「主観」の作用によって成立する。例えば彼は「人が思惟する存在者を表象しようと思うならば、自分自身を自分が表象しようとする存在者の立場におき、……この対象の中に自分自身の主観をうつしかえねばならない。しかし思惟の全体は分割されて多くの主観に分与されることはできても、やはり主観的な私というものは、分割されることも分与されることもできない。」（傍点筆者）⁽⁶⁾と言っている。ところがそれにも拘らず同書の中には「しかし我々の意識の形成を伴った我々自身を他の知的学存在者の立場におかない限り、これを表象することはできない」⁽⁷⁾とか「他の人々と思惟の共同体をなす能力」⁽⁸⁾とか、さては「共同体的主観としての自我」⁽⁹⁾とかという言葉が諸所に散在している。こうしてカントは第一批判では——表面的には——明らかに「分割することも分与することもできない」先験的自我という「主観」の立場をとっている。しかし、それにも拘らず「共同体的主観としての自我」というような「社会的立場」がヒソカにその中にとり入れられているのである。

しかし第三批判になるとこうした混乱は「一応」スッキリとしたものにまで統一されてゆく。例えば彼は「判断力は……その理論的使用において悟性から理性への移行を可能ならしめるように、純粹能力、即ち自然概念（理論理性）から自由概念（実践理性）への移行を可能ならしめる…」⁽¹⁰⁾とか、「たとえ純粹哲学の体系においては判断力の原理は理論哲学と実践哲学（つまり第一批判と第二批判）との間に特別な部門をなす必要はなく、必要に応じてこれら両者の何

れにでも結びつけられるものであるが……」⁽¹¹⁾と言っている。こうして前の引用文では判断力は悟性と理性、及び理論理性と実践理性とを媒介して前者から後者への移行を可能にする「中間者」であり「媒介者」なのである。しかも後の引用文では判断力は理論理性にも実践理性にも「必要に応じて」結びつけられるものとされている。ところでこの「必要に応じて」という副詞句についてであるが、たしかに判断力はオモテだっではハッキリとこれら両理性の中に「共働者」として参加してはいない。しかしそれにも拘らずそれは——これら両理性を裏から支える裏方さんとして、ヒソカこれら両者の中に入りこみ、これと共働しているのではなくてはならない。何故なら第一に、そもそも判断理性は悟性と理性、及び理論理性と実践理性との中間にあり、前者から後者への「移行を可能ならしめる媒介者であり第三者」なのではないか。しかも更に彼は「悟性と理性との間に判断力が存在するように、認識能力と意欲能力との間には快の感情が存在する」⁽¹²⁾と言っているではないか。(そしてこの「快の感情」とは、すぐ次に述べるように、Gemeinsinn、つまり「共通感」という社会的感情のことなのである。)こうして「必要に応じて」とはこれら両理性の媒介者として直接的にはその姿を我々の意識の世界に現わしはしないが、しかしこの裏方さんとしての判断力はこれら両理性を裏から支えるものとして実はそれと共働しているのではなくてはならない。

しかもカントはこの判断理性について、「趣味判断は概念によらないで、ただ感情により、しかも何が普遍的に満足や不満足を与えるかを規定する主観的原理を持っているに違いない。しかしこうした原理はただ共通感Gemeinsinnとして考えるだけである」(傍点筆者)⁽¹³⁾と言っている。(もっともこのGemeinsinnという概念が所謂「常識」とは全く違った別のものであるということに関し、上の引用文に直ちに引き続いて、「この共通感とは人が屢々Gemeinsinn ≪sensus communis≫とよぶ常識der gemeine Verstandとは本質的に違うものである」と言っている。)こうして彼では悟性と理性、理論理性

と実践理性との間には「快」という媒介者又は第三者が存在するが、この快という「感情」は、——決してたんなる「個人的」な感情ではなくて、——実は万人に妥当する普遍的で社会的な「共通感」という社会的感情なのである。たしかに表面的には思惟するのはたんなる個々人の頭脳である。しかしそれは実は常に個々人を超えた「共通感」という普遍的な社会的感情によって支えられているものではなくてはならないのである。

現場教師はしきりに「先ず子供たちに経験させよ。しかし経験させっぱなしでは駄目だ。子供たちに自分が経験したことをもう一度反省させ、経験の意味をハッキリと意識においてつかませる『経験の意識化』』ということが何よりも大切だ」と言う。たしかにその通りである。しかしこの場合、この「意識化」する主体とは一体何であるのか、という点が問題である。前述のように、たしかにカントも第一批判ではこれを先験的自我とよび、思惟をこの主観の作用と「一応」考えていた。しかし第三批判ではこの思惟は実は——悟性と理性、及び理論理性と実践理性との間にあり、これら両者を媒介する第三者としての——判断理性(つまり「共通感」Gemeinsinn)という社会的で普遍的なものによって裏から支えられているのである。こうして(プロレゴメナの) $7 + 5 = 12$ という「先験的にして、しかも拡張的」な総合判断も、——決してたんなる主観の作用ではなくて、——実はこの主観を通じて働く「共通感」という社会的で普遍的なものによって支えられているのである。そしてこの故にこそ、この $7 + 5 = 12$ という主観の作用としての判断も、——アプリアーでありつつ、しかも拡張的でアポストエリオリな総合判断として、——万人に「妥当する絶対的な真理」となることができたのである。こうして彼の批判哲学はその第一批判の時点においても実は既にその「共通感」という社会的立場を暗々裡に前提していたのであり、従って彼の批判哲学はこの共通感という裏方さんに支えられて初めて成立することができたのではなくてはならないのである。

[註]

- 注(1) J.ラカン、エクリ(1)、宮本他訳、弘文堂、昭和60、P.125
- (2) 藤田博史、精神病の構造、青土社、1990、P.129
- (3) 木村 敏、分裂病と他者、弘文堂、平成2、P.4
- (4) 同上、序ii~iii
- (5) 野田義一 認識の成立と人間関係、講談社、昭和40、及び教育学の認識論、御茶の水書房、1978等
- (6) I. Kant, KdrV, A353~354
- (7) " ,ibid,A354
- (8) " ,ibid, A222 B270
- (9) " ,ibid, A350
- (10) " ,KdU, Einleitung, 24~25
- (11) " ,ibid, Vorrede, VI
- (12) " ,ibid, Vorrede, XX iii~XX IV
- (13) " ,ibid, ss.65~66

[II] 思惟の成立について——本論への予備的論述として

たしかに常識的には我々は皮膚を境として外界から画然と区別された個別的な存在である。そして我々はこうした立場、つまり「我あり」ということを何の疑う余地もない全くの自明的なこととして生きている、(フッサールの所謂「自然的態度」)。しかし我々は実は——「人間」又はジンカンとも読めるところのこの「人間」という言葉が既にそれを暗示しているように、——本来人と人(及び人と自然)との間にあり、これら両者を媒介して相互に出会わせてゆく「会い」の作用(私はこの「会い」を更に「愛」と読み進める)によって媒介されて相互に出会っている間主観性で間身体的な存在なのである。つまり我々は既に運命的にこの間主観性、間身体性という絶対的な媒介作用によって媒介されて、「汝に対する我」及び「我に対する汝」として、相互関係的に存在する社会的存在なのである。

ところでこの我と汝とを媒介して相互に出会わせる絶対的な媒介の作用は、自己を汝から「ヘダテル」と共に「ツナグ」ところの地平(又は場)としての「空間」そのものでなくてはならない。しかもこの絶対媒介の作用は、それが我と汝とを一定の地平の上において出会わせてゆ

く以上、それは既にこの「出会いの意味」という目標においてこれら両者を出会わせているのではなくてはならない。何故なら、全く何の意味のないところにこうした「出会わせよう」とする媒介作用が働くわけではないからである。そしてこのことは、この「人間」という絶対的な媒介の作用は——一定の目標又は意味という「未来」へ向かっての「出会わせ」の作用として、——既に「時間」の作用でもなくてはならない。

こうしてこの絶対的な媒介の作用は、一面ではこれら両者をヘダテルと共にツナグところの「空間」の作用であると共に、他面では一定の目標又は意味へ向かってこれら両者を出会わせてゆく「時間」の作用でもなくてはならない。従って「人間」という絶対的な媒介の作用は、その絶対的な弁証法的運動において、本来時空間的な運動そのものでなくてはならないのである。

こうして私の基本概念である「人間」という概念は我と汝(及び我と自然)とをその内部構造の両極として自己の中に内蔵し、これら両極を不断に媒介して相互に出会わせてゆく絶対的な媒介の作用である。従ってこの概念は——これら両極を媒介するものとして、——これら両極に対しては(ラカンの言葉を利用して言えば)「法の代理者」としての「父」、又は「第三者」として存在する間主観的で間身体的なものであり、夫々の者に一定の意味を付与する「意味付与者」でなくてはならない。

もっともこのことは、この「人間」という概念がその内部構造の両極としての我と汝とに対して、(ヘーゲルの所謂)「主と奴」、つまり支配者と被支配者の関係にある、ということでは決してない。(前稿で既に述べたように)「人間」というこの概念とその内部構造の両極とは互いに相互依存的な関係にある。何故ならこの「人間」という絶対的な媒介の作用は実は既にそれが媒介すべき要素である我と汝の存在を前提しているからである。そもそも、もしここにそれが媒介すべき両極が存在していなかったならば、この絶対媒介の作用は一体どうしてその媒介作用を遂行してゆくことができるであろうか。こうした意味でこの「人間」という絶対媒介の作

用は実はその内部構造の両極に依存しているものであり、これによって支えられているのである。又これと反対に、これら両極も自分たちを相互に媒介する絶対媒介の作用に全面的に依存している。何故ならこれら両者は自己を相互に媒介して相互に出会わす絶対媒介の作用によって支えられていればこそ、そしてこの媒介作用によって一定の地平（又は「場」）の上に「ココにいる我」及び「ソコにいる汝」として夫々一定の位置の上に位置づけられていればこそ、初めて「我」及び「汝」という独自のなものとして、この地平（又は場）の上に存在することができるからである。

こうして我も汝も本来この「人間」という絶対的な媒介作用（カント的に言えば「共通感」、そしてラカン的に言えば意味の付与者としての「間主観性」、又は「法の代理者」としての「父」）において、その内部構造の両極をなすものである。しかしこの媒介作用によって支えられた我と汝との相互的出会いとは、現実的には、会話を通じての人と人、又は心と心の出会いでありフレアイである。（この場合私は、この「会話する」legeinという行為の中に身ぶり手ぶりというような身体的表現を含めてゆく。俗にも「目は口ほどにものを言い」と言うが、肩のおのき、一本一本の指の動きこそ、口から出される言葉以上にもっと雄弁に、その人の心を生き生きと我々に伝えるものでなくてはならない。）

ところでこの場合、この絶対的な媒介作用が夫々の人を通して働き、夫々の人を相互的出会い（愛）という温かい人間関係の中に駆りたててゆく時、我々にはこの作用がとかく「自己自身の内界から自己に迫り」、自己をこうした出会い（愛）という相互作用にまで駆りたててゆく暗い力としか感じられず、ここにこれを「自分の心」又は「自分自身の心的衝動」という個人的なものと錯覚してゆく。こうして我々の会話はとかく自分の心を相手にも理解させようと一方的に相手に迫るという自己中心的なものとなってゆくのである。

しかし会話において大切なことは、決して一人シャベリをしてはいけないということ、つま

り相手かまわずに自分の言いたいことを一方的にしゃべりまくってはならない、ということである。もっとも実際的には我々はこの点を充分承知していて、多かれ少なかれ自然のうちに——つまり意識以前の——自分をも相手をも超えた第三者的で客観的な立場に立ち、こうした立場から相手の立場を眺め、自分の話に対する相手の反応を「前もって」自分の頭の中で予想し予測する。そしてここに改めて自分の話を反省的、第三者的に眺め、ここに自分の心が相手の人にも充分通ずるようなものにまでそれを整え直し再構成して語りかけてゆく。

ところでこの「相手の反応を前もって頭の中で予想し予測し」ということも、又こうした立場から自分が話そうとすることを冷静に反省的に眺めるということも、実は我をも汝をも超えた「我々」という第三者的な社会意識による作用であり、これら両者を媒介して相互に出会わせてゆこうとする「人間」の会（愛）の作用でなくてはならない。こうしてここに個人としてはたんなる生物学的存在にしかすぎない我々は初めて「人間」という社会的存在にまで耕されcultivate、動物とは一線をもって画された文化cultureを持つ高貴な存在となってゆくのである。（従って私にとっては「精神」という高い響きを持つものも人と人との媒介して相互に出会わせ、ここにたんなる動物的な存在を「人間」という文化を持つ高い存在にまで耕してゆく超個人的な絶対媒介の作用であり、「我々」という社会意識のことでなくてはならない。そして「心」又は「衝動」とはこうした超個人的で間主観的な作用が個々人を通して働く時、我々がそれを「自己の内奥から自己に迫る自己自身の所有物」、つまり「私物」と錯覚した時にそれに対して与えられた名称にしかすぎない、ということになってゆく。）

ところでこの会話legeinにおいては、上述のように、夫々の人が夫々「我々」という第三者的な立場に立ち、自分の話に対して起こるであろう相手の未来の反応を頭の中で「前もって」予想し予測し、同時に自己の話を客観的反省的に眺めてゆくが、この作用こそ正に思惟でなくてはならない。こうして思推という（常識的に

は) 全く冷厳な論理的な作用は、実は会話という温かい喜びにみちた人間関係の上に——ゲシュタルト心理学的に言えば、「地」の上に浮かび上がる「図」として、——初めて成立するのである。こうしてそれは我々が自己egoという狭い閉鎖的な世界から一步その外にまで脱自し脱中心化し、ここに「我々」という間主観的で間身体的な「人間」Selfの世界にまで脱出してゆくところにこそ初めて成立することができるのである。(してみると会話という温かく楽しいものの中には、実は脱自、——更に一步進めてハッキリ言えば、——脱我という厳しい禁欲的で宗教的な性格がヒソカニ存在しているのでなくてはならない。)

たしかに常識的には思惟といえそれは個々人の大脳小脳という生理学的な器関の作用である。しかし実はそれは思惟cogitoする人が、——ハッキリとはそれを意識しないままに、——自然に「我々」という第三者的で社会的な立場に立ち、こうした「社会一般」という広い立場に立って対象を思惟するという社会的な作用なのである。勿論この場合、その対象に対しては外見的には「自己」という一個の主観である。しかし彼は——いはば自己が所属する社会全体の代表者として、——その対象に対してなのであり、それは決してたんなる個人などではないのである。(前述のようにカントにおいても判断力Gemeinsinnは悟性と理性、及び理論理性と実践理性との間にありこれら両者を媒介する作用であり、「必要に応じてこれら両者の何れにでも結びつけられるもの」ではなかったか。こうして彼においても思惟cogitoという全くの主観的作用の中にはGemeinsinn〈英訳すればcommon sense、つまり「全員に共通なセンス」〉という社会的感情が結びついているのであり、これが思惟を裏から支えてこれと共働しているのである。)

さて以上のような点を補説するために、私は本県のPTA連合会の会誌にのせられた次のような実践記録を利用することにしたい。それは算数の時間の直線に対して垂線を下す学習である(図1参照)。図(1-a)の場合には子供たちには何の問題も起こらない。しかし図(1-

図1-a

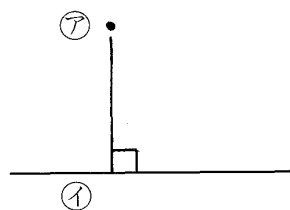
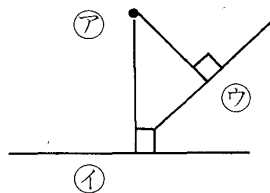


図1-b



b) になると「アレレ……垂線がない!!」という突然の叫び声と共に、「先生、おかしいよ、この問題できないよ」とH君が言い出した。

勿論教室は忽ちザワメキの場に一変する。そして子供相互の討論でだんだんハッキリしてきたことは、このH君は、垂線とは自分がいる位置⑦に対して水平な線に直角に下されるものだと思っている、ということである。だから——⑦の位置にいるH君にとっては斜線にしかみえない線に対して⑦→⑨という線(つまり垂線)を下すなどということは絶対にできない、ということになる。しかし他の子が「H君、私がいる⑨のところに来て、この場所から見てごらん」という声でようやくこの子も納得することができた。つまりこの子は自分が今いる場所⑦から他の子がいる場所⑨に移って、このウから見れば事情は(1-a)の場合と全く同じことである、ということに気がついたのである。

これが教育というものである。たしかに常識的には教育とはたんなる「知識の伝達的作用」と考えられ易い。しかしこの知識という言葉はこれを「大人になった時、最低限必要な常識」と翻訳する時には、この常識はcommon sense、つまり「(個々人ではなくて、) 全員に共通なセンス」として、社会的でcogito以前のものとなってゆく。たしかに人と人との相互作用においては、これら両者を相互に出会わせてゆくための媒介物、又は手段として、知識という形式的で論理的なものが先ず前面に出てくるであろう。しかしこの常識(又は知識)をその裏から支えているのは実は「我々」という温かい人間的なもの(つまりGemeinsinnという社会的感情)なのである。こうして知識というものは決して冷

厳な法則的なものなどではなくて、実は「人間」という媒介作用がその作用としての会話において、自己自身を現実の中に具体化したものでなくてはならないのである。

(ところで、私は人と人とを媒介して相互に出会わせてゆく絶対媒介の作用としての「人間」という概念をSelf又はSelbstと名付け、その媒介作用をconscienceとよんで、以下の論を展開してゆくことにしたい。何故ならそれはconとscireの合成語であるが、conはcommonとして社会性を、そしてscireは「知る」という知的作用を示す。こうした点でconscienceというこの概念は人と人とを媒介して相互に出会わせてゆく「人間」という概念にピッタリ当てはまる言葉だからである。これに対してcommon senseという言葉は、「全員に共通なセンス」として、(自我の成立以前の) 自他未分的な幼児期の子供の心性を表現するのに適切な言葉であるように私には思われる。そこで私は——幼児期の子供の思惟と少年期以降の人々の思惟とを峻別するために、——これを以下conscienceとよんでゆくことにしたい。)

[Ⅲ] 悟性の成立

(a) 幼児期の人間関係と思惟

ではいよいよ本題に入ってゆくことにしたい。ところで上述のように、コギトの作用は我々がegoという狭い世界から一步その外に足をふみだし、「人間」という第三者的で客観的な立場に立つこと、換言すれば「人間」という間主観的で間身体的な立場にまで脱自し脱中心化することによって始めて成立するのである。しかしこの絶対媒介の作用の具体的で現実的な姿としての人間関係のあり方は、乳幼児期、少年期、青年期と、子供たちの発達段階に応じて、夫々異なった形をとって現われてくる。そこで本題に直接的に入ってゆく前に、私は先ず幼児期における子供たちの人間関係と彼等の思惟との関係を一瞥してゆくことにしたい。

カントはその第一批判の中で次のように言っている。「我々はすべての認識の根底にアプリアーに存在する純粹構想力を人間の心Seeleの根本能力として持っている。そして我々はこの

構想力によって一方では直観の多様と、他方では純粹統覚の統一の条件とを結合する。二つの反対の極、即ち感性と悟性はこの先験的機能によって必然的に関聯しあう」⁽¹⁾と。

こうして彼では人間の心Seele(という心理主義的なもの、つまり個々人の心としか解釈できないようなもの)の根本能力である純粹構想力はその内部構造の両極として感性と悟性とを持っている。そしてこの構想力がこれら両極を媒介して相互に関聯させてゆくのである。(この点に関してハイデッガーも「受動性が感性を意味し、能動性が悟性を意味するならば、この時には構想力は特異な仕方において、これら両者の中間に存在する」⁽²⁾と言っているが、) カントでは感性と悟性は同じ心Seeleの受動的側面と能動的側面として、いはば紙の表と裏との関係にあるのである。

たしかに成人の我々においてもボンヤリと放心的な状態にある時と、積極的な能動的に問題にとりくんでゆく活動的な時とがリズムをなして現われてくる。しかし児童生徒の発達段階という立場からこれを見てゆく時には、前者(つまり心の受動的側面としての感性)は乳幼児期に、そして後者(つまり心の能動的側面としての悟性)は徒党の時代Gang Ageとよばれる少年期にこれを対応させてゆくことができるであろう。そしてこの場合、幼児期の子供の「受動的」な生き方と少年期の児童の「能動的」な生き方は、——「感性」と「悟性」の夫々が成立する母胎としての——夫々の人間関係のあり方と不可分的に関聯しあっているはずである。そこで悟性の成立についての考察に入ってゆく前に、先ず——「能動的な作用としての悟性」の裏面であるところの、——幼児期の人間関係について一瞥してゆくことにしたい。

もっとも幼年期の子供の思惟(感性)については前稿⁽³⁾で既に論述済みなので、本稿ではこの人間関係による(フロイトの所謂)原抑圧と、その上に立って成立する本来の抑圧作用としてのエディプスコンプレックスを中心としてこの問題を考察してゆくことにしたい。

ところで乳児は勿論のこと、この幼児期の子供は親に全面的に依存することによってしか生

きてゆけない。勿論親は我が子に対しては徹底的に献身的であり、その養育には「あまりにも神経質的」と思われるほどに細心の注意を拂ってゆく。こうしてこの時期には親と子（特に母親とその子）との間の人間関係には「一応」何の問題も起きようがない。（木村教授も「自己がまだ他者を抵抗として意識していない時には、世界は等質で透明な持続の底に沈んだままである」⁽⁴⁾と言われているが、）こうした理想的なまでに調和的な家庭での人間関係においては幼児たちの心性が自他対立以前の未分的なものとなってゆく、ということとはまことに自然なことであろう。たしかに彼等が「自己ego」というものを意識するのは自分と、自分を取りまく親達との相互的出会いが乱れた危機的な状況においてである。（丁度普段は全く意識されていない胃の存在は、それが変調をきたした時に初めて我々に意識されてゆくように。）

こうして乳幼児期の子供たちはこの親と自分との全くの無問題的な人間関係を——丁度母親が自己と子供との出会いである家庭を「自分の生命の中の生命life of lives」、つまり「自分の生命そのもの」として生きてゆくように、——これを「自分の生命そのもの」として生きてゆく。こうしてこの愛（会い）につつまれた無問題的な家庭での人間関係は彼等の生命そのものとして彼等の中に化肉化されてゆく。（これが躰というものでなくてはならない）。精神分析の世界ではしきりに幼児体験の重要さが強調されるが、まことに「三ツ子の魂百まで」とか「雀百まで踊り忘れず」であって、彼等の中に化肉化され身にしみついた幼児期における体験というものは、たとえその成長につれて彼等がどんなに異なった人間関係の中に入ってゆこうとも、「この同じ自分の生命」として、彼の中に一貫し生き続けてゆくであろう。

しかしこの場合大切なことは、表面的には一応全くの無問題的な平和なこの家庭での生活においても、彼等は既に親と子との一定の人間関係の中にあるということ、そしてここに人間関係がある限り、ここには必ず「抑圧」の作用が働いている、ということである。川柳にも「恥ずかしさ、よりは可愛さ乳を出し」とあるが、

夫々の親にも夫々の都合というものがあり、常に子供の要求に応じてゆくわけにはゆかない。こうしてここにフロイトの所謂「原抑圧」Urverdrängungが必然的に成立してゆく、ということになる。しかもこの原抑圧は——本来の抑圧作用であるエディプスコンプレックスに先だつ最初の抑圧作用として、——その上に立って初めて成立する次のコンプレックスに対しても影響を与えてゆく。この点に関して彼は、「我々が治療の仕事で扱う多くの抑圧は後期抑圧の場合である。それ（後期の抑圧）は早期に起こった原抑圧を前提とするものであり、これが新しい状況に対して引力の影響を与える。」⁽⁵⁾と言っている。もっとも、この原抑圧においては「本来の抑圧作用の担い手としての超自我」はまだ成立以前であり、従ってそれは原抑圧には何の関係も持っていないという点に関し、次のように言っている。「抑圧のさいの超自我の役割を高く評価しすぎるといふ危険に陥りやすい。この場合、超自我の登場が原抑圧と後期抑圧との区別をつくりだすものかどうか、ということについても今のところ判断が下せない。いずれにしても最初の——もっとも強力な——不安の襲来は超自我（という本来の抑圧の主体）の分化の行われる以前に起こる。」（傍点筆者）⁽⁵⁾

上記の引用文は児童生徒における思惟の成立と発達を追求してゆこうとする本稿にとって、まことに重大な意味を持つ。たしかにフロイトは原抑圧についてはこのように簡潔に述べるだけであって、それ以上のことは何も言っていない。しかし前の引用文では彼は後期の抑圧（つまり本来の抑圧としてのエディプスコンプレックス）はこの原抑圧を前提としており、これによって影響をうけてゆく、と言っている。前出の木村教授も、「フロイトが精神医学に対して果たした最大の貢献は無意識というものを幼児期の対人関係から次の時代の対人関係への伝導路として取り出したことにある」⁽⁶⁾と言われているが、「児童生徒における思惟の成立と母胎は彼等を取りまく人間関係の中にある」とする私の理論にとって、この点はまことに重大な意味を持つ。何故ならいくら自他対立以前の未分化な心性においてであろうとも、幼児たちは家

庭という一定の人間関係の中に生きている、そしてその限り彼等も——幼児なりに——この家庭での人間関係に順応して（時には親からの圧力によって順応させられて）生きてゆかなければならない。こうしてこの時期においても幼児たちには既に原抑圧が働いているのである。例えば乳児でさえ乳児なりに、——勿論「意識以前の」な全くの萌芽的な状態において、ではあるが、——母のホホエミに対して（いはば）本能的に笑顔で答えて、一層母の愛に応じてゆこうとしているのではないか。

このことは勿論彼等が既に「間主観性」（又は本稿の所謂「人間」）という第三者的で客観的な立場に立っているということではなくてはならない。勿論それは成人のそれとくらべればタワイモナイ全くの萌芽的な未熟なもので、いはば条件反射的なものにしかすぎないかもしれない。しかしそれにも拘らずこの原抑圧によって成立した「間主観性」というものは本来の抑圧であるエディプス期において成立する「間主観性」の基礎をなすと共に、子供の成長に伴って次々と成長してゆく後続の人間関係のあり方、従って、この人間関係において成立する「間主観性」にも影響を与えてゆくのである。しかもこの人間相互の社会的な関係に必然的に伴う「抑圧」こそ、（本稿も主張するように、）*cogito*という対象把握的な思惟の成立する唯一の母胎でなくてはならない。（この点に関して藤田教授も「ここでまず最初に起こっている（原抑圧という）事態こそ『否定』という事態にほかならない。『否定』こそフロイトも言うように、『第一次的な欲望の戯れから知的機能が生まれてくる過程』を決定づけている要因であり、原抑圧において欲望を願望（意欲）とその運動（形式）とに分裂させる張本人であろう」⁽⁷⁾）と言っている。）

（傍点筆者）

（b） 少年期の人間関係と悟性の成立

勿論このエディプスコンプレックスの原型としての原抑圧は——意識以前の、（いはば）本能的なものとして、——抑圧以前の全くの「萌芽的な作用」にしかすぎない。しかしそれに拘らず母のホホエミに笑顔で答える乳児の笑顔の

中には愛の喜び、（つまり人と人を媒介して相互に出会わせる「会い＝愛」の喜びという人間の生命そのものが輝いている。そしてこれは勿論「間主観性」という第三者の輝きでなくてはならない。そしてこうした原型としての原抑圧の上において本来の抑圧としてのエディプスコンプレックスは初めて成立してゆくのである。しかもこの時、このエディプス期の中にある子供の家庭での人間関係の乱れの為にこの子の中に正常な「間主観性」が形成されていない時には、それは必然的にこの子の次の段階としての少年期での人間関係のあり方に対して影響を与えてゆく。前述のように、フロイトも「いずれにしても最初の——もっとも強力な——不安の襲来は超自我の分化のおこなわれる以前に起こる」と言っているのではないか。そもそも幼児期での乱れた不正常な家での人間関係の中に育ち、マツウな愛（会い）に恵まれなかった子が次の段階に入ったからといって、果してどの程度まで友達との間に良好な人間関係をつくりだしてゆくことができるであろうか。

こうした点はしばらくおいて、少年期に入ると彼等はこれまでのような親に全面的に依存して生きるという受動的な生き方をヘイ履のようにすてさり、自分で自分の仲間を見つけ、能動的積極的にその仲間との遊びの中に没入し、その中にノメリこんでゆく。徒党の時代Gang Ageとよばれるガキの時代の開幕である。そして家という狭い世界の中での親子の間での「依存」と「保育」という濃密な、（いはば）ゲマインシャフト的な人間関係から、自分が自分の意志で選びだした友達とGangを構成してゆくという（いはば）ゲゼルシャフト的な人間関係への転換は——カント的に言えば、先験的構想力の「受動的側面としての感性的生き方」からその「能動的側面としての悟性的生き方」への180度のコペルニクスの転換として、——彼等の思惟だけではなくて、その人格をも根本的に転換させてゆくものでなくてはならない。

（もっともこの点を——子供たち個々人ではなくて、——「人間」又は「間主観性」という逆の立場から見れば、それは人と人とを媒介して相互に出会わせてゆく「人間」又は「間主観

性」という絶対媒介の作用が次第に成長し、ここにその内部構造の両極としての我と汝という両極が夫々相互に相手に対して「自己」egoという独自の独立的なものとしてハッキリとした姿のものにまで成長してきたということである。前述のように、たしかに絶対媒介の作用はそれが媒介して相互に出会わすべき我と汝とを前提している。従ってそれは自己の内部構造の両極としてのこれら両者が夫々「我」及び「汝」として確立されてゆかない限り、自己自身も絶対媒介の作用として成長してゆくことはできない。こうして「人間」又は「間主観性」という絶対媒介の作用の成長はその内部構造の両極としての「我と汝との成長」によると共に、この反対に、我と汝の成長も亦「人間」又は「間主観性」という絶対媒介の作用の成長によるのではなくてはならない。）

〔してみるとこの「間主観性」というものは我と汝との相互作用という現実とは一切関係なく、それ自身として超然と存在する絶対的でア・プリオリなものなどでは決してない。それは我と汝との相互的出会いというその都度毎の現実の場における出会いによって、その都度毎に成立させられてゆくものでなくてはならない、ということになる。木村教授も、「ヴァイゼッカーの『主体』とはもともと意識や実存とは無関係な個体と世界との相互関係であって、自己に最初から備わっているような連続的な同一性のことではない。むしろ《主体がクリーセにおいて消滅の危機に瀕したときにこそ我々は初めて真に主体に気付く》のであり、《主体》とは確実な所有物ではなく、それを所有するためにはそれを絶えず獲得し続けなくてはならないものである」⁽⁸⁾と語られている。

勿論このことは、この絶対媒介の作用によって媒介される我と汝も亦この媒介作用によってその都度毎に我及び汝として夫々構成されてゆく、ということである。何故なら——西田哲学の言葉を借用して言えば、——本来全くの無中心的な作用である絶対媒介の作用が自己自身を限定して——我及び汝という特定の存在の中にその作用の中心を局所化してゆく時、ここに初めて我及び汝という「それ自身として存在する

独自のなもの（つまりモナドとしての自己ego）」が成立してゆくのであるからである。]

このことは彼等子供たちが成長するにつれて（カント的に言えば）、人間の心Seeleの根本能力である先験的構想力も今や受動的な側面としての「感性」的な生き方から、その能動的な側面としての「悟性」的な生き方に転換したということである。「僕はもうネンネでもなければ幼稚園児でもない」と誇り高く胸をはって自己egoを主張し始めた、ということである。勿論この場合にも人と人とを媒介して相互に出会わせようとする絶対媒介の会（愛）の作用は彼を通じて働いている。（だからこそ彼はしきりに友を求め、友との出会いの場である徒党gangを切に求めてゆくのである。）しかし前述のように、彼等は自己を通して働くこの絶対媒介の作用を今や「自己の内奥から自己に迫る自己の心、（又は衝動）」という自分の所有物と錯覚し、ここに自己egoという独自の存在として自立してゆこうとし始めたのである。

この時、彼等のこうした誇り高い自己を支えるのは「意識」という自他対立の二元論の上に立つ論理的で分析的な作用である。従って彼等の仲間との遊びの生活においても、彼等は互いに激しく自己を主張しあう。こうしてgangでの遊びにおいては口争いはたえないということになってゆく。しかしこの場合、——すぐ暴力をふるって自己の主張を通そうとする幼児期の子供とは違って、——彼等は多かれ少なかれ自己の主張を理屈で合理化し、相手を説きふせようとする。こうして少年期にある彼等の激しい自己主張はたんなる自己主張ではなくて、既に「我々」という仲間意識によって媒介された「相互的出会いにおける自己主張」であり、こうした社会的立場の上に立っての自己主張のぶつかりあいなのである。

しかしこうした激しい自己主張のぶつかりあいとしてのgangでの出会いにおいては、——誰しもがそうであろうが、——子供ながらに彼等は自分にとって不利になるようなこと、（例えば自分の弱点として友達から低くみられるような暗い面）は極力これを友達から低くみられなくそうとする。こうして自己egoという誇りにみちた存

在として生きようとする彼等においては、その誇りにそぐわないようなカッコ悪い点は、——友達ばかりではなくて——自分の意識の世界にも浮かび上がらないように抑圧され無視されて無意識の世界に追いやられてゆく。エスナールも「自分自身に認められる行為や徴候でも、自分の残余の精神生活に結びつけられない（ような）ものは、まるで他人事のように感じられるものである。経験の教えるところでは我々の心が我々のものと認めたくないような行為はこれを別なふうに考えてゆくほうが納得がゆく」⁹⁾と言っている。[こうした点は少年期の彼等についても亦そのまま妥当することであろう。そしてここにラカン及びラカン派の人々にとっては「無意識は決してカオスではなくて、固有の秩序を持つ」とか、「無意識は言語のように構造化されている」ということになってゆく。たしかに私の立場から考えてもそうでなくてはならない。何故なら少年期の子供たちがgangでの人間関係の中に生きてゆくに際し、自分の恥部として友達の目からかくそうとし、又自分自身でもそれを認めたくないような自分の「影」の世界は自分の中に化肉化された幼年期における自分の家庭での人間関係であり、又これによるものなのである。こうして無意識は私にとっても一定の構造を持つものでなくてはならない。]

ところで——親に全面的に依存してきた乳児期からの脱却としてのエディプス期の子供たちの第一反抗期、質問期への転換と同様に、——幼年期から少年期への転換は受動的な生き方から能動的な生き方への転換であり、感性から悟性への思惟の大転換でなくてはならない。たしかにそれは自我Selfの自覚の時代としての青年期とくらべれば質的、次元的に全く劣った自己egoという低いものにおける転換であるであろう。しかし今や彼等はこの自己egoという独自の自主的なものに目覚めたのである。(ところで親への全面的な依存に生きてきた幼児たち、そしてここに親の目を通じて自然を見ていた幼児たちが「一応ながら」親から乳ばなれして自分の足で大地に立ち、こうした立場から「自分の目」でこの自然に対してゆく時、自然は何と水々しく新鮮なものとして彼等の目に映ってゆ

くことか。「お日様はなぜ毎日出てくるの」、「川の水は何故流れるの」。所謂質問期である。) 丁度このようにようやく自己egoという独自のなものに目覚めた彼等少年期の子供たちの目には自然はこれまでとは全く違った新鮮なものとして映ってゆくはずである。

こうしてこの時期の子にとってはすべてが彼等の関心と興味的となってゆく。しかし(幸か不幸か)、彼等の関心や興味的のは——自然そのものではなくて、——むしろgangでの友達との遊びであり、その人間関係である。つまり彼等の関心や興味は如何にしたら自分はこの遊び集団の中にその席をえられるのか、又如何にしたらこの集団の中でより高い席をえられるのだろうか、というような現実的で具体的な問題について集中的に向けられてゆく。(そして悟性とは正にこうした現実の生活についての事実判断の作用なのである。)

ところで興味又は関心interestはinter(間に)esse(ある)という二つの言葉から成る合成語である。(してみるとそれは実は人と人との間にあって、これら両者を相互に出会わせるという本稿の所謂「人間」という絶対媒介の作用なのであり、だからそれは人間生命につけられた別の名前でなくてはならない) こうして自己egoという誇り高いものに目覚めた彼等少年達の生命にとって、——自然ではなくて、——むしろこのgangでの友達関係こそがその最大の関心と興味的になってゆく。

ところで我々が外的環境に対して受動的な姿勢で、つまり何の関心も興味もなく、ただボンヤリとこれを見ている時には、外的自然は何の構造も持たない全くの未分化な一全体として我々のウツロな目に映じてゆくだけである。そしてここにこの一全体の夫々の要素は、「ココにaがあり、ソコにbがあり、そしてアソコにcがあり……」というように、「場」という一定の地平の上に夫々位置づけられて相互関係的に存在する「一つの構造体の夫々の要素」という独自の個性的なものとしてでは決してなくて、いはばこの一全体の中に埋もれてその姿をかくしたままであり、夫々のものとしては存在してはいないのである。

しかし一度我々が外的世界に対して特定の関心又は興味をもって接してゆく時、(つまり我々が受動的姿勢から能動的な姿勢に転じ、ここにこうした特定の関心や興味を中心としてこれに対してゆく時、) 外的自然はその姿を一変して、こうした関心や興味に対応した自然として我々の前にその姿を現わしてくる。(そしてこれも亦フッサール現象学の所謂「現象」の——但し「悟性という事実判断の作用」という低い次元における——一つの現れ方でなくてはならない。)

例えば我々が「こんなことをしたら損だ(又は得だ)」というような俗的な利害打算の立場に立って自然に対してゆく限り、それは決して「自然そのもの」(つまり「物自体としての自然」)としてその本来の姿において我々の前に現われて(現象として)はこない。これに対して我々がこうした利害打算という俗的で自己ego中心的な立場を超えた澄みきった瞳で無心虚心にこれに対してゆく時には、自然は初めて物自体としての本来の姿において我々の前に現れて(現象として)くるのである。

勿論これは青年期に特有な「理性」についてのことであって、本稿の主題である「悟性」という事実判断の作用についての話ではない。しかし理性も悟性も——人間関係という同一なものが夫々の発達段階に即して生みだした作用につけられた夫々の名であってみれば、——その本質において同一なものでなくてはならない。してみるとこの悟性が「我思う」というcogitoの対象把握的な論理的作用として自然に対してゆく時、——「物自体」としての自然そのものとしてではないにせよ、——この悟性の深淺高低の程度に応じて、自然はその姿を我々の前に現してくるはずである。

以上のことで私が言いたいのは、見る目の深さに応じて自然は深くも浅くも見えてくる、ということである。換言すれば子供たちの関心や興味の深さ(又は程度)に応じて自然はその姿を彼等の前に現してくる、ということである。

[勿論このことは、関心や興味さえ持てば直ちに自然が見えてくる、ということでは決してない。前述のように、関心や興味、つまりinterestとは我と汝(又は対象)との間interにあって

esse、これら両者を媒介して相互につなぐ媒介の作用という「運動」であり、それはそれ自身として存在する「実体」などという既成的で固定的なものなどでは決してない。従ってこの第三者的な媒介作用に導かれて自己egoがその対象とより一層深く出会おうと努力すればする程、自然も亦一層ハッキリとその姿を我々の前に現してくる、そしてここに我々は改めて一層自然に対する関心や興味を新たにしていけるのである。このことは勿論子供たちについても全く同様でなくてはならない。(ところで私は「目」と「眼」、「見る」と「視る」とを対立させて、後者を、例えば「心眼」で「視る」というように、深い意味におけるものとして以下の論述に使用してゆくことにしたい。)]

こうして関心や興味という(カントの所謂「人間の心の根本能力としての先験的構想力の能動的側面」は、いはば自然一般の中から、——その関心や興味の深さの程度において、——その子の眼(又は目)にみえてきた「その子しか視えない(又は見えない)その子だけの自然」を自然一般の中から(いはば)切りとってこの子に与えてゆく。こうしてこの子は「自分だけに所属する自然」を自分の手で創造し構成してゆくのである、丁度カメラマンが彼自身しか写せない自分独自の美の世界を自然界の中から切りとって自己のカメラに収めてゆくように。

ところでこの場合、このカメラマンが「これこそ自分が求めている美そのもの」としてカメラの焦点をしぼってゆけばゆくほど、その焦点を合わされた対象以外のものはピンボケとなり、ここにそれは焦点の対象を一層クッキリと画面の上に浮かび上がらせてゆくための地(背景)となってゆく。丁度そのように、言語というものは我々の関心、興味という能動的な作用によって環境一般から切りとられた「私自身の環境」という特定のものにおいて、「地の上に浮かび上がった図」として私自身の手によって構成され創造されてゆくのである。

例えば少年期の彼等が自己egoという狭い個人的な立場から脱出して「我々」という第三者的で客観的な立場、(つまり「間主観性」という社会的な立場)に立って自然に対して立ち、こ

うした一段高い立場から自然を眺めてゆく時、こうした彼等の自然を眺める眼の、深さ浅さに応じて、自然は「彼自身しか視えない自然」、つまり「彼だけにしか所属しない彼だけの自然」としてその姿を現してくる。例えば小高い裏山に登って自分が住む街を一望の下におさめてゆく時、夫々の家のたたずまいというような細部は見えなくなり、自分自身が実際にその場所に立たなければ決して視えないような自分の街の一全体としての構造が見えてくる。丁度そのように我々が（そして子供たちが）自己という狭い立場から間主観性という一段高く又広い立場に立ってその対象に対してゆく時、その対象は——「個々の要素」において、ではなくて「一定の構造を持った一全体」として——我々の（そして子供たちの）意識の前に現れてくるのである。

そこで私はこの点をバナナという言葉为例としてとりあげて考察してゆくことにしたい。たしかにバナナは一本一本をとりあげれば、その大きさも形も又その色も千差万別である。しかし子供たちが「僕はバナナが大好き」とその友達に「語りかけて」ゆく時、それは「バナナ一般」について言っているのであって、一本一本のバナナについて言っているのではない。しかもそれは自分の好みについて言っているのではなくて、——時には相手の子が「僕バナナなんか大嫌い」と言うかもしれないが、——ともかく「相手にも通ずる言葉」として「バナナ」と言っているのである。つまりこの子は自分をも相手の子をも超えた第三者的な間主観的立場に立ち、こうした立場から——これまで実際に自分が賞美したバナナも、又これから賞美するであろうバナナも全部一括し、しかも更に自分以外の友達の総ての者も食べた（又は食べるであろう）バナナをも一括して、——全部のものを「バナナ」という言葉の下に一括しているのである。こうして、——丁度小高い山の上から街を見下ろしこれを一望の下にとらえてゆく時、家々のタタズマイというような細部は背景として退き、これまで見えなかったこの街全体の構造というものがこうした背景の上に「地の上に浮かび上がった図」として我々の前に現れてく

るように、「バナナ一般」を代表するものとしてのこのバナナという言葉が（地の上に浮かび上がった図として）彼等の会話の場に登場してくるのである。

ところでこの場合大切なことは、彼等の会話において「構造」として浮かび上がったこのバナナにおいては一本一本のものは——その大きさや形、又色等々においてどんなに千差万別であろうとも、——この構造の夫々の要素であるという点で同資格のものであり、従って「同じバナナ」として等質化され同質化されたものである、という点である。つまりどのバナナも「バナナ一般」の中の夫々の要素として既に1、1、1……という無個性的なものにまで変質させられているという点である。しかもそれは1、1、1……という無個性的な等質化なものであると共に、同時に1→2→3……という順序数的なものでもなくてはならない、という点である。

[何故なら間主観性という第三者的な立場に立って眺められる時、対象は一定の構造を持ったものとしてその前に現象してくる。しかしこの構造について人が他者に語ってゆく時、この話者は当然「自分の立場を中心として」この構造の諸要素を「先ず最初にaについて、次にbについて、次に……」と自分の立っている位置を中心として時間カテゴリーの上に順序づけ、ここにそれを相手にも充分理解可能なものにまで構成し直して語ってゆく。こうして会話の作用は1、2、3……という順序化の作用でもなくてはならないからである。]

[補説]

勿論この時空間カテゴリーは（カント的に言えば）「感性」のカテゴリーであって「悟性」のカテゴリーではない。しかし前述のように、彼では感性も悟性も「人間の心Seeleの根本能力である先験的構想力」の受動と能動との両側面につけられた夫々の名前であり、本来同一なものではなかったか。そしてこうした立場からいえば、——彼が「アリストテレスの範疇とは全く遠ざかったけれども、本来はそれと同じである」⁽¹⁰⁾とことわって使用しているところの——例の「量、質、関係、様相」としての12ケのカテゴリーは先験的構想力という同一なものが受動から能動に転じた時、感性の時空間カテゴリーが悟性の12ケのカテゴリ

リーとして分化しただけのものでなくてはならない。そこで（紙数の関係上感性と悟性の両カテゴリーの相互関係についてこれ以上論述する余裕もないので、）彼等子供たちの思惟のカテゴリー化の作用を——説明の便宜上——感性の時空間カテゴリーによって代用されてゆくことにしたい。

ところでこの $a \rightarrow b \rightarrow c \dots$ という順序数化は「 a という原因から b という結果が生まれ、そして b から c が……」と自然を因果関係的に把握する作用でもなくてはならない。（だからこそ小学校でも自然を「因果関係的」に把握させてゆく理科は高学年に配され、たんなる直観的な観察としての自然観察を中心とした生活科は低学年に配されているのである。）そもそも自然を因果関係的につかむということは時間という一定の地平の上に $a \rightarrow b \rightarrow c \dots$ と事象を順を追って並べてゆくということである。してみると彼等子供たちの中に既にこの時間カテゴリーが成立していなかったならば、それは絶対に不可能なこととなる。そもそもこの時間カテゴリーは（空間カテゴリーと共に、）「人間」又は「間主観性」という第三者的で客観的なものの媒介の作用なのではなかったか。してみるとそれはこうした世界への目覚めの時代としての Gang Age において初めて成立するものでなくてはならないのである。

してみると、物理的又は化学的な発想が強い理科という学科が gang での生活を通じて時空間カテゴリーが子供の中に成立する小学校の高学年に配されてゆくのは至極当然なことである。（もっとも間主観性という第三者的で客観的な立場こそ思惟という論理的な作用の母胎であってみれば、それは上述のような算数や理科だけではなく、国語や社会等々とその他の教科全部についても言えることでなくてはならない。そしてこうした立場から現行の教科書の構成、さらにはこの教科書を中心とした現代の教育方法を眺めてゆく時、そこには無数の問題点が見出されてゆくのではなからうか。しかし本稿はこうした臨床的な問題を直接的に狙うものではないので、今はこれにとどめることにしたい。）

[註]

- 注(1) I. Kant, KdrV, A124
- (2) M. Heidegger, SuZ, s.117
- (3) 野田義一、身体的思考——その教育学的考察、東海女子大学概要 9 号
- (4) 木村 敏、分裂病と他者、弘文堂、平成 2 年、p. 7
- (5) S.フロイト、フロイト著作集(6)自我論・不安本能論、井村他訳、人文書院1978、p.325
- (6) 木村 敏、上掲書、p.42
- (7) 藤田博史、精神病の構造、青土社、1990、p.92
- (8) 木村 敏、上掲書、p.146
- (9) A.エスナル、フロイトからラカンへ、影山任佐訳、金剛出版、1983、p.64
- (10) I. Kant, KdrV, A80 B106

[IV] 児童における思惟の発達と人間関係

残りの紙数も乏しくなりつつある現在、以上のような本稿の立場を今度はこれを心理学の実験例と関連させて考察してゆくことにしたい。ところで「思惟は人間関係において成立する」というのが本稿の基本的立場であった。つまりそれは他者との出会いとしての社会生活において、我をも汝をも超えた「人間」又は間主観性という第三者的で客観的な立場に立ち、こうした立場から冷静に自己自身（そして他者）を反省的に眺めてゆく能力であった。そして我々がこうした第三者的で客観的な立場から外的自然に対してゆく時、この反省的な眼（つまり「それを視よう」と積極的能動的に対象に働きかけてゆく我々の眼）に対して自然は「この眼がそれを視ようとしている構造としての自然」として現れて（現象して）くるのであった。そしてここに（例えば）バナナという半抽象としての言葉が初めて誕生するのであった。つまり会話において我々が「このバナナは……」と相手に語りかけてゆく時、それは——「このバナナ」という一本のものについてではなくて、——「バナナ一般」という構造におけるバナナとして語られているのであった。こうしてそれは誰にでも通用するバナナという社会的な言葉として語られているのであった。もっとも幼児期の子供にとってさえ、バナナを他のものから区別することは容易である。しかし彼等はただ直観的に

「これもあれもみんなバナナ」として、つまりそれを一つのマトマッタ全体として漠然とつかんでゆくだけであって、意識においてハッキリとそれをつかんでいるのではない。そしてそれをハッキリと彼等に意識において把握させてゆくのは勿論社会的な作用としての会話なのであった。

そこで私は「概念」という抽象的で論理的なものをたんなる「言葉」というたんに「半ばしか抽象的なもの」であるにすぎないものから一線をもって画然と区別しておくことにしたい。たしかに幼児達も家での親との会話において既にバナナという「言葉」を使用している。何故なら彼等も家での人間関係において——たしかにそれは全く未熟で素朴なものにしかすぎないが、ともかく間主観的で第三者的な立場を現実的に生きている、そしてその故にこそ彼等は意識以前の、直観的にその対象をバナナとして把握し、ここにこの言葉を使用して親と会話することができるのである。しかしまだ親に全面的に依存しなければ生きてゆけない彼等においては、従って(自我Selfは勿論のこと)、自己egoもまだ存在しない彼等においては、このバナナという言葉は——親たちがそれを使って会話している既成的な言葉として、——ただ「受動的」に受けとめられ、たんなる言葉として使用されているだけである。これに対して「概念」は先験的構想力の能動的側面としての「悟性」という能動的な作用によって初めて成立するのである。例えば「バナナ」と「桃」の上位概念は「果物」である。勿論この「果物」という概念も、今日では日常使用されるものとして、子供達にとって「言葉」に近いものであるかもしれない。しかし彼等が「バナナも桃も果物だよ」と言う時、彼等は既にこれら二つの言葉を反省的に眺め、ここにこれら二つの物を比較することによって、——多かれ少なかれ、——これら両者の

共通点を夫々の意識においてハッキリとつかんでいるのである。こうした点でそれは——たんなる「言葉」ではなくて、——思惟という能動的な作用によって創造された概念でなくてはならない。

こうした意味でブルーナーの『認識能力の成長』及び四宮教授の『言葉的思考における抽象作用の発達の研究』は私にとってまことに興味深い。但し私は本稿の主題との関係においてこれら両書に興味と関心を持つ者である関係上、——上述のバナナと桃とをめぐっての「言葉」から「概念」への移行の問題についての考察の展開として、——ブルーナーの「等価性の認知」⁽¹⁾の実験の結果だけを要約的に引用してゆくことにしたい。

被験者は各年令とも10名(男5、女5)で、6才から14才までの子はボストン郊外の小学生、16才児は近くの郊外の高校生、そして大学1年生はハーバード及びラドクリフ・カレッジの学生である。そしてその知能指数は(9才は122、11才は115、13才と15才は何れも122と)すべての年令ともに水準以上である。

課題は先ず彼等にバナナと桃の共通点と相違点をあげさせる。次にこれに「ポテト」を加え、これら三つのもの(桃、バナナ、ポテト)の共通点と相違点をあげさせる。更にこれに「肉」を加え、これら四つのもの(桃、バナナ、ポテト、肉)の共通点と相違点をあげさせる。こうして、(桃、バナナ、ポテト、肉、牛乳、水、空気、そしてばい菌)の列にまで広げた時の彼等の反応をグラフ化したものが図1である。もっとも彼は更に第二系列として(ベル、警笛、電話、ラジオ、新聞、本、絵画、教育)というややムツカシイ列系をこれに加えている。当然この場合においては上位概念を見出すことは最初のものよりも困難であり、従ってその結果は低いものとなっている。^{*1}(次頁に続く)

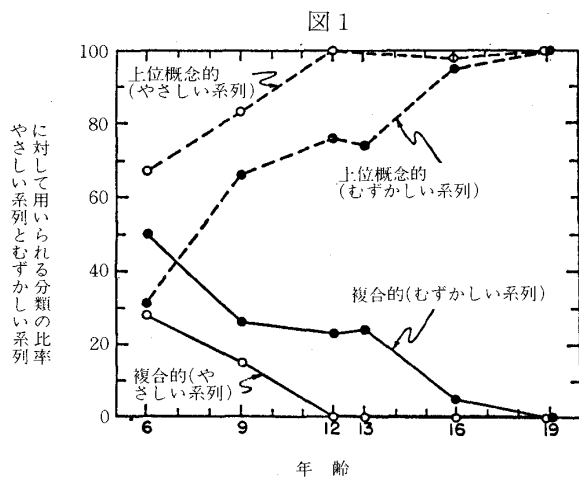
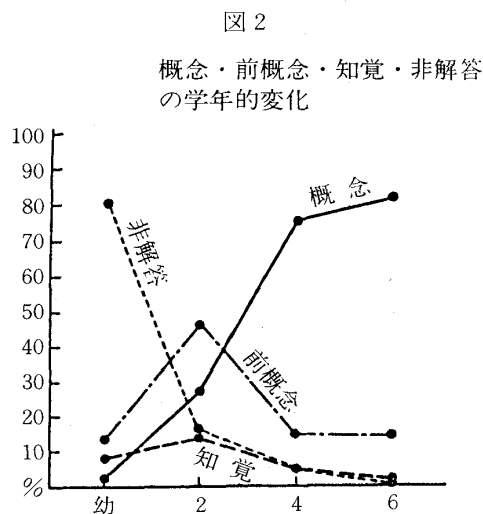


図5 系列がやさしい場合とむずかしい場合における複合の並びに上位概念的の比率

心理学専門の研究者ではない私としてはこのブルーナーの実験に対して口をはさむつもりは全くない。ただ「児童生徒における思惟の能力は人間関係において初めて成立する」ということを主張したいだけの私からこのグラフを見る時、彼の場合においても、児童生徒が上位概念を獲得する能力が9才から12才にかけて急激に伸びているというグラフ上の結果に「サモアリナン」という共感をいだくだけである。しかしこうしたブルーナーの実験結果を更に補強するという意味において、私は四宮教授の実験結果⁽²⁾を図2として掲載しておくことにしたい。



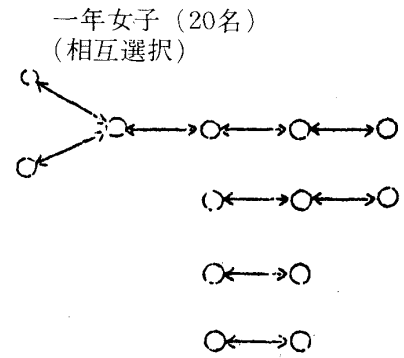
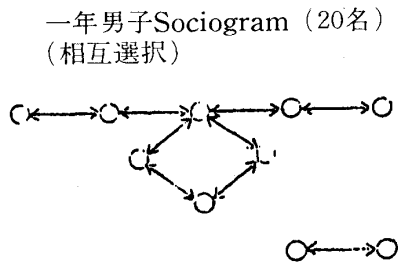
もっとも同教授の実験においては二物間（例

えば「自動車と電車」、「オーバーとズボン」等）と、三物間（「大根、ねぎ、なす」、「金づち、かな、まり」等）と二種類の問題となっているが、本稿は都合上三物間の共通点を（例えば前者は「野菜」、後者は「大工道具」というように）上位概念においてまとめる能力の成長変化に関するグラフのみを示すことに止めた。ところで図1の場合と同様にこの図2においても概念の成立は（2年生では27.4%であるのに対し、4年生では76.0%、そして6年生では81.5%と）gang ageにおいて急激な上昇を示している。そこで次に私はこうした結果を私が行った小学校児童のソシオグラムと関連させて思惟の能力と人間関係との相互的な関係を確認してゆくことにしたい。⁽³⁾

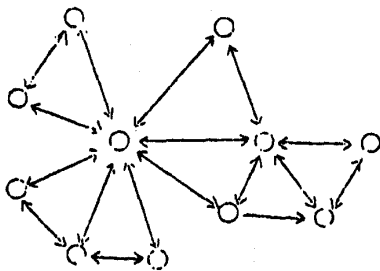
ところでこの調査は、1972年の一月下旬に岐阜市内の市立長良西小学校で行ったものである。楽しいお正月からそれほど遠くもない一月下旬ということもあって、「お母さんが新年を祝うパーティの用意をして下さいました。お友達の誰をおよびしますか。およびする子の名前とその子をおよびするわけを書いて下さい」という設問に対する彼等の回答をグラフ化したのがこの図3である。但しこの場合、私は相互選択のみをとりあげ、一方選択はこれを「一応」無視した。その理由は勿論このグラフが複雑になりすぎることを避けるためでもあるが、しかしその最大の理由はこの調査が思惟と人間関係との相互的な関係を追求してゆこうとする私の研究の一環としてなされたものであったからである。つまり「パーティに誰をおよびしますか」ということを通じて、「誰が好きですか、お友達ですか」と彼等の友人関係の実態を洗い出そうとする意図の下にこの調査は行われたのである。そしてこうした立場からすれば永続する友人関係を示すものは——一方選択ではなくて、——相互選択でなくてはならないからである。

ところでこの図では一年生でも（男女共に）夫々クラスの半数以上の者が相互選択を行っている。してみると、——もしこの図をマトモにうけとめてゆけば、——この一年生の中にも本稿の所謂「間主観性」という第三者的立場が（「ある程度」ではあるが、）既に成立している、とい

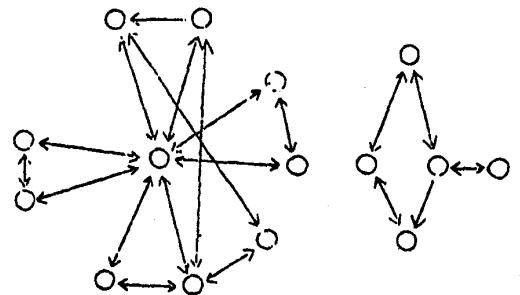
図 3



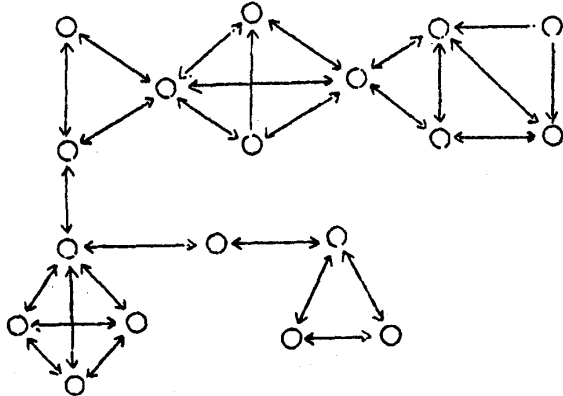
三年男子Sociogram (19名)
(相互選択)



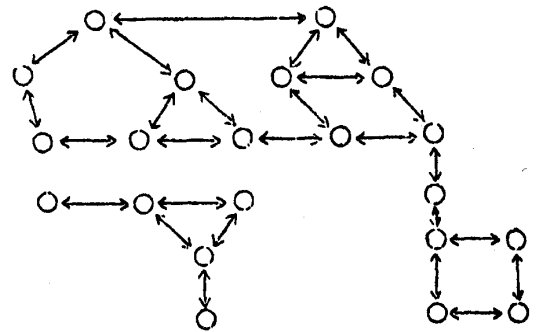
三年女子Soceogram (20名)
(相互選択)



五年男子Soceiogram (18名)
(相互選択)



五年女子Sociogram (20名)
(相互選択)



うことになる。しかしこれは彼等の回答をそのままグラフ化したために外見的にはそのように見えるだけである。例えばオヨビする理由を改めて検討すると、実はそれは「〇〇ちゃんは学校へ行く時、私の家の前を通るので何時でも私をよんでくれるの。それで私は〇〇ちゃんと一緒に学校へ行くから」等々というような、実にタワイもない理由によるのであり、いはば偶然的で表面的な理由によってなのである。

こうして彼等ははまだ一人遊び又は平行遊び

の時代としての幼稚園の延長上にあるのであり、従ってクラスも砂の集まりにも似たパラバラの子供の集合体にしすぎない。こうして彼等はまだ感性的認識の段階にあるのである。ここに、例えば1年生の六月段階においては「太郎は10円、次郎は8円持っています。誰がイクラよけい持っていますか」という算数の問題において、彼等は「太郎です」「2円よけい持っています」と答えることはできても、「誰がイクラよけいに」とこれを総合することは彼等にとって「一

応」困難なことになってゆく。これはまだ彼等には個々の要素を媒介して相互に出会わせてゆく間主観性という構成的な作用（つまりカテゴリー）が充分発達していないからである。（だからこそ国語の桃太郎の話でもその話の展開にそって、「オバアサンは川へ、桃が流れてきた、家へ持って帰って割った、桃太郎が生まれてきた……」と話の流れにそってこれを一つの物語りとして把握してゆくことは困難なのである。）こうした点でLaurendeau & Pinard⁽⁴⁾の『子供における空間概念の発達』はまことに興味深い。例えば同書は子供における左右の弁別能力に関して三名の研究者の研究結果をとりあげているが、ピアジェにおいては自分の身体の左右の弁別は5.0才、自分と向きあっている人については8.0才、そして三つの物についてはナント11.0才である。（表1参照）このように子供たちの空間カテゴリーの発達は意外に遅々たるものなのである。

しかしこのことは、これを図3における三年及び五年の子供たちのソシオグラムと関聯させて眺める時にはいささかも意外なことではなくなっているのではあるまいか。何故ならカテゴリーは人と人とを媒介して相互に出会わせてゆく絶対媒介の作用としての「人間」又は間主観性の作用である。そしてこの作用の現実的な現

われである彼等の人間関係の実態は実は図3が示すようなものであるからである。

ところでそろそろGang Ageに突入してゆく三年生から分数小数の学習が始まり、四年になるとその掛け算や割り算が始まる。これはおそらく長年にわたる教育実践の経験からえられた判断によってとられた方策であろう。そして図3の三年生のソシオグラムから見て、これは当然なことだと私には思われる。何故なら、例えば $\frac{1}{2} + \frac{1}{3}$ の計算においては、夫々異なった分母の上に立つこれら両数は共通の分母の上に立つ数にまで変形されなければ、（つまり $\frac{1}{2} \times \frac{3}{3}$ 及び $\frac{1}{3} \times \frac{2}{2}$ という中間的な手続きを通じて $\frac{3}{6}$ と $\frac{2}{6}$ という同一の分母の上に立つ数にまで変形されてくれば、） $\frac{5}{6}$ という正答は決してえられない。（丁度gangにおいては、「僕たち」という仲間意識（つまり間主観性）が夫々の子供を「仲間の一員」という社会的存在にまで変身させてゆく、そしてここに初めて彼等はこの共通な地平の上に立つものとして相互に出会ってゆくことができるように。）ところが上掲のソシオグラムは正にこの三年生において特定の子を中心としたグループが成立しつつあるということを示しているのではないか。そしてこのことは、この三年生の頃から個々の子供を「仲間の一員としての自己ego」という社会的存在にまで変身させ転身

表1 左右の概念のテストの夫々の問題に成功した被験者の年齢分布：

(※4)

年齢	人数	1. 自分の身体	2. 相手の身体	三つの物		三つの物
				3a. 見える	3b. かくす	(3a+3b)
12:0	50	49	42	36	40	33
11:0	50	47	40	29	30	26
10:0	50	49	40	28	27	22
9:0	50	49	37	21	17	16
8:0	50	47	26	15	15	10
7:0	50	42	19	8	10	7
6:0	50	32	7	4	5	2
5:0	50	24	10	3		
総計	400	339	221	144	144	116
平均年齢		9.0	9:9	10:3	10:5	10:7
可能年齢		5.1	7:10	9:93	9:9	10:8

表2 左右の概念のテストの諸問題に関して著者達が正常に成功したとする年齢の比較；

(※5)

著者	基準	1. 自己の身体	2. 相手の身体	3a. 三つの見える	3b. 三つのかくれた物
Piaget	75%	5:0	8:0	11:0	12:0
Galfret-granjon (1960)	75%	6:0	8:0	11:0 12:0 ※	
Elkind (1961d)	75%	5:0	7:0	10:0	

注：この年齢においては、得られたパーセントはまだ基準以下である。それは僅か60%にすぎず、13:0, 14:0歳においてさえも66パーセントを超えない。

させる間主観性という第三者が成立しつつある、ということである。こうしてこの第三者という媒介的作用の成立によってこそ、彼等は初めて $\frac{1}{2} + \frac{1}{3}$ の計算に対して $\frac{1 \times 3}{2 \times 3} + \frac{1 \times 2}{3 \times 2}$ という媒介的な手続きをとることができるのである。

ところで本稿はこうした教育の現場に直接関係するような臨床的な問題を論ずることを狙っているものではない、そこで、こうした問題はこれを別の機会に改めてとりあげることにしたい。しかしここで私が言いたいことは、——例えば「児童生徒における思惟の成立は彼等を取りまく人間関係による」というような——こうした立場から眺めてゆく時、現行の教科書にもられている教材の学年的配列、及びそれを使用する教育方法には諸々の問題点が存在するのではないのか、ということである。つまり現代の教科書も教育方法も「確固とした理論又は原理」の上に立つものではなく、むしろ長年の実践から自然に得られた経験知の上に立つものではないのか、ということである。ノーベル生理学・医学賞受賞の利根川博士も立花氏との対談『精神と物質』で、教育学について「たとえば人間の知能はどう発達してゆくのか、……そういうことがきちんと原理からわかった上で、だからこうすればいいんだという処方下されているのかというと、そうじゃない。現象的な経験知の集大成にすぎないんです。当然こういう処方には限界があるわけです。」⁽⁵⁾とされている。この言葉は教育学研究にたずさわる私にとってはまことにキツイ言葉である。私が本稿で執拗なまでに児童（生徒については次稿）における思惟の成立を人間関係との関係において論述したのもこのためなのである。

[註]

- (1) J.S.ブルーナー、認識能力の成長（上）、海外名著選（I）岡本他訳、明治図書、1982、p.127
- (2) 四宮 晟、言語的思考における抽象作用の発達の研究、新光閣書店、1971、p.291
- (3) 野田義一、言語教育研究集録、岐阜大学言語教育研究会、1973、p.5
- (4) M. Laurendeau & A. Pinard, Development of the Concept of Space in the Child, 1977, p.270

(5) M. Laurendeau & A. Pinard, ibid, p.275

(6) 立花 隆、利根川近、精神と物質、文芸春秋、1990、p.257

[V] 悟性の活生化

たしかに悟性は上述のように——決してたんなる自己egoの頭脳という生理学的な器関の作用ではなくて、——実は「人間」又は間主観性という第三者によって支えられているのである。しかしこの第三者が自己を通じて働き、自己と他者とを出会わせようとしてゆく時、我々はとかく自己の内奥から自己に迫るこの暗い力を「自己の心(又は衝動)」とを錯覚し、これを「私物」と勘違いしてゆく、そしてここにこの自己egoという狭い個人的な立場に立って外的世界に対してゆきやすい。しかしこうした自己中心的な立場（我執）において外的世界に対してゆく時、この冷厳な我々の視線の前には生命あるものでさえもたんなる物という物的存在にまで物化されてゆく。（そしてこの結果として自己自身もたんなる物体としての存在としての身体的存在となってゆく。）

こうして悟性はとかく自己の立場を絶対とし、そのカテゴリーを自然におしつけ、ここにこのカテゴリーという名のフィルターによって濾過されたものだけを自然として把握してゆく。そしてここにこのカテゴリーに即さないようなものはすべて皆抑圧されて無意識の世界へと追いやられてゆく。例えば少年期に入った子供たちは、自己egoという誇り高い立場において、その恥部である幼年期（つまり自分の幼年期における人間関係の一切）を無意識の世界に追いやり、これを忘却という名の暗い牢獄のなかに幽閉してゆく。

しかしこの幼年期における人間関係の中にこそ「原型としての自己自身」、つまり「知情意一体」としての本来の自己自身の姿があるのではないか。しかし意識がこうした知情意一体としての本来の自己自身から自己に即さないものを無惨にも切りすててこれを無意識の世界に追いやられてゆく時、それはもはや絶対媒介的作用によって媒介されて他者と出会い、ここにこの相互的出会い（愛）を通じて人間生命をより豊か

なものにまで成長させてゆくべき——他極に対する一極としての——自己egoなどではありえなくなってゆく。してみると本稿の所謂「人間」又は間主観性という絶対媒介の作用（つまり人間生命そのもの）も亦、——その内部構造の両極としての自己egoと外的自然が夫々物化され、ここに夫々のものが他極と出会おうとする活力又は生命力を失ってゆくにつれて、——その絶対媒介としての活力を失って次第に衰弱化してゆかざるをえなくなってゆく。

「しかし悟性は人間関係において初めて成立する、つまり夫々の者が間主観性という第三者的な立場に立ち、これによって媒介されて夫々相互に自己を他者と出会わせようとする作用なのではないか。それなのに第三者的立場に立つ、という悟性のこうした会（愛）の作用が一体どうして絶対媒介の作用そのものとしての人間生命をカエッテ衰弱させてゆくのか。」こうした反論が直ちにハネ返ってくることであろう。しかし悟性、つまりcogitoという対象把握的な作用は本来自他対立の二元論の上に立つものなのではないか。そしてこうした冷厳な対象把握的な立場からすれば、たとえそれがどんなに自分の愛する人であろうとも、それも外的自然と全く同様な身体的存在、つまり物的存在にしかすぎないはずである。もっとも我々は人間であり、人間関係を無視しては決して生きてゆけない。そこで我々は自己と他者とを夫々の「意識」において努力して出会わせてゆこうとする。しかしこうした「意識」において構成されてゆく人間関係は——本来の出会いとしての会（愛）ではなくて、——たんなる利害打算という冷たい原理によって結ばれた表面的な関係でしかありえない。してみるとこうした人間関係においては——本稿の立場からすれば、——真の意味における思惟cogitoは成立しえないはずである。では真の意味における思惟（悟性）は一体どのようにしたら成立することができるのであろうか。

これは我々が「人間」又は間主観性という絶対媒介の作用の内部構造の一極にしかすぎないところの自己egoのcogitoという対象把握的な作用を「知情意一体としての人間生命という一

全体から切りはなして」、それだけを取り出すからである。再びカントを利用して言えば、そもそも人間の心Seeleの根本能力である先験的構想力の受動的側面と能動的側面につけられた名前が「感性」であり「悟性」なのではなかったか。つまりこれら両者は本来同一のものであり、いはば紙の裏と表の関係にあるのではなかったか。してみるとこの先験的構想力の表の面である悟性には常にその裏の面である感性がヒツツイテいるはずであり、これが悟性と協働しているはずである。つまり悟性という「意識」の世界の中には感性という「無意識」的な世界が共働者として存在しているはずなのである。

たしかにGangAgeの中にある子供達の激しい自己主張を支えるものは表面的には自他対立の二元論の上に立つ悟性である。しかしその対象把握的な作用は実は感性によって裏ウチされているのである。つまり幼年期における家庭での人間関係がこれを支えているのである。してみると彼等の悟性の成長はこの感性との二人三脚的な共同によってのみ初めて可能になる、ということになる。感性と悟性、つまり幼年期の家庭での人間関係と、少年期のgangでの激しい自己主張の人間関係との調和的統一によってのみ初めて悟性は豊かな生命力に満ちた逞しい生命力を持ったものとなることができるのである。しかし受験戦争の嵐の中にある現代の子供たちにおいて、こうした活力に満ちた悟性の教育はどれだけ生かされてゆくことができるのであろうか。